

「私とジェンダー」をテーマに
毎回様々な切り口でコラムを
掲載しています。

ジェンダーと私

とみた・さちこ

73年に大阪府立高校の国語教師となり、09年に定年退職。在職中は「府立高等学校同和教育研究会(府高同研)」(現「府立学校人権教育研究会」)の中に設けられた「男女平等教育特別委員会(→女性解放教育→性差別撤廃教育、と改称)」に所属。96年に、北京行動綱領を地域で具体化しようと呼びかけ、高槻ジェンダー研究ネットワーク結成した。

高槻ジェンダー研究ネットワーク代表

富田 幸子

私が「ジェンダー」に出合ったのは、90年代の初め。女性差別撤廃条約の批准(85年)で男女同一カリキュラムが求められ、高校でも94年から家庭科男女共修が始まる。半ば公的な研究団体である府高同研の中に、部落問題、在日朝鮮人問題、障害者問題といった人権教育の諸課題の一つとして、女性差別の問題が取り上げられるようになったのはそのころだ。当時の女子生徒には、高校卒業後の進路の話が出るころになると、「私、女やから高校卒業したら短大でええわ。どうせ結婚するねんから」「下に弟がいるし、学費がかかるから就職するわ」というようなかたちで、入学当初は非常に意欲的に勉強していた生徒が、「女」である自分を意識し出すといっしか向学心を失っていくというケースが少なからず見られた。こうした現状を何とか打破したいと、私は、93年、府高同研で活動を始めた。教師としていろいろな人権教育の課題に取り組んできたが、特別委員会の設置で、自分自身の問題でもある女性差別の問題にようやく正面切って取り組むことができるようになったのだ。

最初に取り組んだのが男女混合名簿。今では多くの学校で採用されるようになった男女混合名簿も、実現するまでは教師間で激しい議論があった。最も根強い反対は、「男女特性論」。男は男らしく、女は女らしくあることを理想とし、男と女は、互いの違いを認め合つて支え合うことが大切だ、というのだ。

「ジェンダー」という言葉・考え方は、こうした「特性論」を破る大きな武器だった。生まれながらの生物学的な性差である(sex)に対し、genderは、社会的、文化的に「作られた性別」である。genderは「社会的文化的性差」と訳されて終わることが多いが、それだけでなく、genderには、男は上・強者/女は下・弱者という力関係が含まれる。それゆえ「ジェンダー」というカタカナ語でしか表せないのだ。

私は、高校で、女ことば/男ことばを取り上げ、ジェンダー問題に気づかせる授業に取り組んだ。授業では、生徒によく次のような話をした。

英語には、日本語ほど、男女のレベルの教育者がジェンダーの

Here, my darling」の「my darling」は、ドラマや映画で、日常の夫婦の会話などによく登場する。妻から夫、あるいは夫から妻の双方とも互いに「my darling」と声を掛け合う。ところがこれが日本語に訳されると、「ねえ、あなた/おい、おまえ」と、女ことば/男ことばの差が生じる。言葉は生得的なものではない。この差は、まさしく社会的文化的に作られた性差だ。「ねえ」は、下の者が上の者へ何かをねだったり甘えかける時によく用いられるが、「おい」というのは、決して下の者から上の者へ用いられることはない。つまり、この社会的文化的性差には、明らかに上下関係が内在している。この話のある市民の集まりで話すと、ある年配の女性から、「今どき、妻に『おい、おまえ』などという夫はいないでしょう。私の娘の夫が娘に『おい、おまえ』などと声をかけたら、私は『そんな男とはすぐ別れなさい!』と言ってやりますよ」という発言があった。このように、ジェンダーのありようは、変えられるし、変わっていくものだ。

北京行動綱領には、「あらゆる